

私が大蔵寺に入山して、先ず初めに思ったことは「ここは本当に寺なのか？」という事だった。

時期は春、写真家や観光客、地元民にとっては良い行楽シーズン。

駐車場でもない本坊前には、早朝から既に数台の写真家の車が停車されていて、盛り土をした花壇に乗り入れている車両もあった。

そして、どのように考えても、車で通行が困難な境内を無理矢理通行しようとする行楽の車。

私がお勤めで本堂に上がろうとすると、歩行者が回避困難な参道であっても、無理に車で通行しようとする者からクラクションを鳴らされ、こちらが怒鳴られる。

車を何とかやり過ごすと、本堂に向かう階段では写真家が数人、三脚を広げて行く手を阻み、本堂に用事があるので道を空けて欲しいと懇願しても、写真家は何も聞こえていないふりをして無視。

仕方がないので、裏から回り道をするとう度は裏道に、その写真家のものらしき乗用車が道をふさいで停めてある。

朝の内に鍵を開けておいた本堂は、私が何とか辿り着く頃には既に何者かの手によって全開に開扉されており、そこに写真家が土が付いたままの三脚を本堂に持ち込み、あろう事か秘仏本尊の写真を撮っている。

その様は、まるでグラビアアイドルの撮影会の様であった。

ある者は賽銭箱に座って弁当を食い、ゴミを持って帰ると思いきや、ゴミ袋ごと本堂前に放置して帰って行く。

使用済みのコンドームが捨ててある。

どんなに立ち入り禁止と言っても、本堂に入り込む写真家と行楽客。

中には土足の者までいた。

毎月21日の大師縁日に開扉している大師堂では、無断で立ち入り、住職にしか着座が許されない礼盤に座り念仏を唱える者、写真家は写真撮影に適した場所を探し、遠慮会釈無しに私の生活圏内まで入って来る。

木に登り撮影をする者、石仏に片足をかけて写真を撮る者。

そして、私が何処にいようと、撮影の邪魔だと暴言を吐かれ、僧侶としてなすべき事が出来ない。

ハイキング客の落としていくゴミの数々、写真家が落としていくフィルムケース。

いつの間にか数が減っている本堂の線香。

真冬の夕方には、早朝の雲海の景色を撮るための待機者が境内で車内泊の準備を始め、車のオーディオを大音量で流す。

早朝には、彼らと同類の者が40～50人、山頂に所狭しと三脚を立て、見回りの私が立ち入り禁止の表示がある旨を伝え下山を促すと一斉に罵詈雑言「坊主は帰れ！」のシュプレヒコールが起こったときもあった。

酷い者になると暴力を振るい、威嚇してくる。

警察の出動も数回要請した。

彼らが帰った後は、まるで暴動後の様であり、とにかく散らかされたゴミにはうんざりしたものだ。

これが、年中続いた。

数ある行楽客の中には、その様な人もいる、等というようなレベルでは無い。

夜の安息の時間でも、境内に迷い込んだ写真家が防犯装置のサイレンを鳴らす。

これが夜間の内に2～3回。

当然私は見回りに行く。

睡眠不足などと言う生易しいものではなく、眠らせないという昔の拷問さながらの苦痛が数年と、長い事続いた。

### 大蔵寺の運営と、地元民の大蔵寺への関わり方はどうであったか。

先代住職の川井には、一切の権限がなく、大蔵寺の近隣であるというだけで、檀家でも信者でもない地元が大蔵寺の運営を行い、寺総代も地元自治会員が担い、その中には仏教以外の他教徒も含まれていたという、極めて異常な状態の中で、住職はただ決定事項の承認をするのみで、寺として受け入れ難い事柄であっても、受け入れざるを得ない圧力、完全に地元の言いなりになっていた状態が長く続いていた。

### 地元民の横暴極まり。

参拝客から依頼された祈願の最中であつたとしても、地元民への対応を優先させられ、祈願中の堂に乗り込んで来られる。

地元から依頼されて行った行事には、過剰な飲食の接待を強いられ、地元役員が上座、大蔵寺僧侶が最下座。

日常的に供物や保管の酒は勝手に呑む、仏像に尻をむけて寝転び尻をたれる。

想像し難い事を、やりたい放題。

挙句には、誰のおかげで寺がやれると思っているのか！と恫喝をしてくる始末。

かと言いつつ、地域からの布施は、行事以外には一切なし、行事にて一件あたり500円の金額ですら高いと自治会長から文句をつけられる始末であり、他所からの参拝者や仏事で訪れた方に難癖をつけて嫌がらせを行っていた事も明らかになっている。

例えば、参拝で大蔵寺へ上がる際は、地元役員に挨拶をしてからでなければならないなど。

この様に宗教寺院として、宗教法人として自立した運営は一切、行えずにいたのが大蔵寺の現実である。

自立が出来ていない一例として、大蔵寺への祈願などの申し込みや、観光課からの問い合わせは、何故か大蔵寺ではなく、地元役員に行われていた事や、布施の金額もそ

の際に地元民が決定していた。

文化財書類の送付も大蔵寺ではなく、地元役員へ行われていたなど。

この様な状態が先代の時分から続いていたのだ。

もちろん、寺院としての収入など無いに等しく、先代は職安に勤めに行き糊口をしのいでいた。

大蔵寺の世代が当代の私に変わった時、何かにつれ大蔵寺の運営は地域がやるから、くれぐれも難しい事を考えないで欲しいと、事あるごとに我々に言い続けてきた自治会と、大蔵寺の運営は地域に任せよと言う大宇陀町教育委員会に非常識さを感じ、強い不信感を抱きながら、副住職と私は大蔵寺運営と再建に着手始めたのである。